



ズワイガニ（日本海系群B海域）①

ズワイガニは我が国周辺では日本海、オホーツク海、および茨城県以北の太平洋沿岸に分布し、本評価群はこのうち本州日本海沿岸の新潟県以北秋田県以南に分布する群である。本海域の漁獲量や資源量等は漁期年（7月～翌年6月）の数値を示す。漁期は10月～翌年5月。



図1 分布域

秋田県～新潟県沖の大陸棚斜面および縁辺部（水深200～500m）に分布。産卵場は分布水深帯の浅い方にあり、各地に点在。島、天然礁がある急峻な海域で、漁場は分布域に比べごく狭いと考えられる。

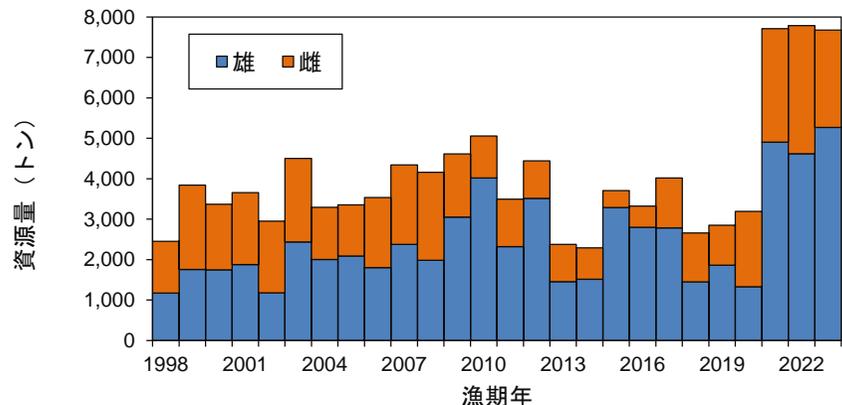
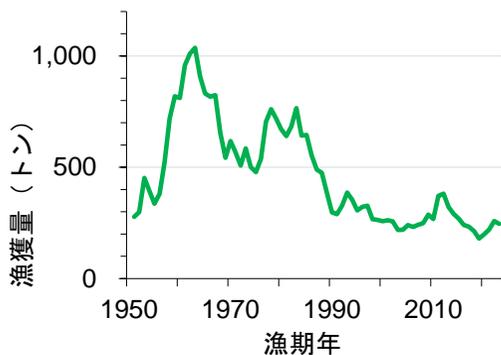


図3 資源量の推移

かご調査で推定した漁期開始時点の資源量の推移を示した。雄は甲幅90mm以上、雌は成熟個体の合計を示す。

雌雄合計の資源量は、1998年漁期以降は2,300～5,000トンで推移している。2010年漁期に5,000トンを超えたが、その後減少し、2014年漁期は過去最低の2,300トンとなった。2017～2020年漁期は2,700～4,000トンで推移し、2021年漁期より急増し、2023年漁期の資源量は7,678トンであった。



(1998年以前は暦年の値)

図2 漁獲量の推移

漁獲量には、1960年代に約1,000トン、1980年代に約800トンのピークがみられる。その後は減少し、1990年代以降は200～400トンで推移している。2023年漁期の漁獲量は246トンであった。

ズワイガニ（日本海系群B海域）②

令和3年3月に開催された「資源管理方針に関する検討会」および「水産政策審議会」を経て、本評価群は再生産関係が不明であるため、MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）を、加入量当たり親魚量が、漁獲圧が0の場合の値に対し30%となる漁獲圧（ $F_{30\%SPR}$ ）により代替すると定められた。

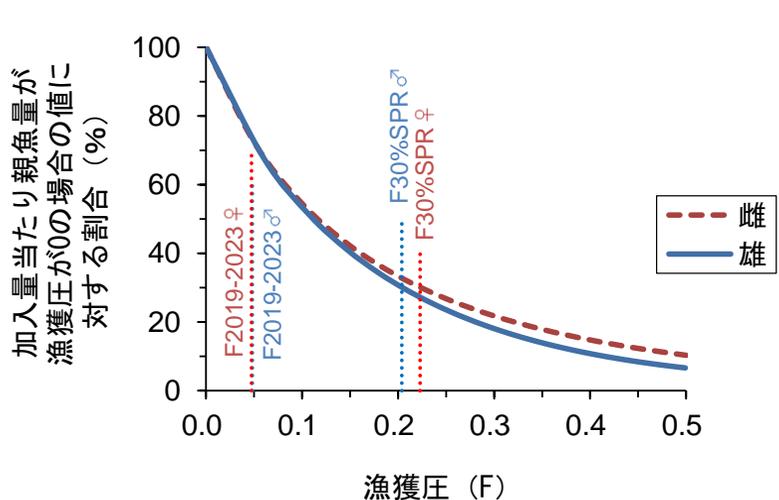


図4 MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値（ $F_{30\%SPR}$ ）と現状の漁獲圧の比較

目標とする $F_{30\%SPR}$ は雄が0.20、雌が0.22である。現状の漁獲圧（ $F_{2019-2023}$ ：2019～2023年漁期の平均）は雄0.05、雌0.05であり、雌雄ともに現状の漁獲圧は、 $F_{30\%SPR}$ を下回っている。

漁獲管理規則は $F_{30\%SPR}$ に不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。

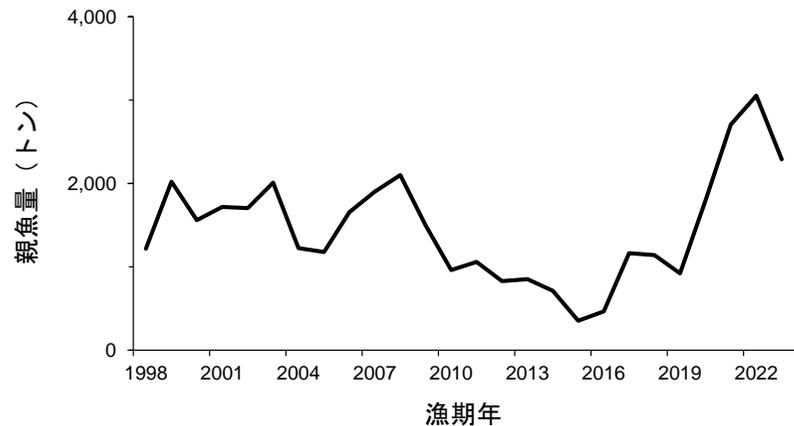


図5 親魚量の推移

かご調査に基づき推定された親魚量（漁期後の雌の資源量）を示す。

親魚量は2009年漁期までは1,200～2,100トンで推移し、2015年漁期は過去最低の353トンとなった。2017～2020年漁期は920～1,800トンで推移し、2021年漁期から急増して、2023年漁期は過去3番目に高い2,289トンであった。

目標管理基準値はMSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値とした $F_{30\%SPR}$ の漁獲圧により達成される親魚量と定められた。ただし、将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。

ズワイガニ（日本海系群B海域）③

	親魚量 (トン)	説明
目標管理 基準値	—*	加入量当たり親魚量が、漁獲 圧が0の場合の値に対し30% となる漁獲圧で達成される親 魚量の水準
現状の値 (2023年漁 期)	2,289	かご調査に基づき推定された 雌の漁期後の資源量

* 目標管理基準値は将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。

2025年漁 期のABC (トン)	2025年漁 期の資源 量予測値 (トン)	現状の漁獲圧 に対する比 (F/F2019- 2023)	2025年漁期 の漁獲割合 (%)
910*	5,800*	3.53	15.6

漁獲管理規則はF30%SPRに不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。

2025年漁期の資源量の予測値と漁獲管理規則(0.8F30%SPR)に基づき算出された2025年漁期のABCは910トンである。

* ABCは十トン未満を、資源量は百トン未満をそれぞれ四捨五入した値である。